國學院大學学術情報リポジトリ

『源氏物語』〈女系繁栄譚〉試論：明石の入道と按察大納言の血統観

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 神原, 勇介, Kambara, Yusuke
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000733

『源氏物語』〈女系繁栄譚〉試論

―明石の入道と按察大納言の血統観―

神原勇介

はじめに

須磨巻終盤では、光源氏の謫居を聞きつけ、娘の婿に迎えようとする明石の入道（以下、「入道」）の画策が語られる。入道は妻にそのことを相談するが、身分差などを考慮して難色を示される。ゆえに、光源氏の出自を説き、反論する。

①故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし大納言の御むすめなり。②いと警策なる名をとりて、宮仕に出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへるいとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとて、思し棄てじ」など言ひゐたり。（須磨②二一一）

傍線①では、光源氏の亡母桐壺更衣（以下、「更衣」）と、入道自身の親類関係を語る。更衣の父「按察大納言」（以下、「大納言」）は、入道の「をぢ」にあたる人物だという。この人物は、桐壺巻時点で故人であり、その名前のみが語られてきた。入道一家のことが物語中最初に語られたのは若紫巻だったが、光源氏との血縁が語られたのは右が初めてだった。

須磨・明石巻以後、明石一族は光源氏の栄達と深く関わって存在感を増すため、右の記事は重要視されてきた。藤井貞和氏は、『源氏物語』第一部に更衣一家の遺言実現の物語の側面があるという[1]、いわゆる〈家の遺志〉論を提示した。日向一雅氏はさらに、大納言と入道の父大臣を兄弟と見て、父大臣の「ものの違ひ目」（若菜上④一二八）が原因で両家が衰亡したと推察する。そして、大納言と入道が娘の入内や結婚に拘った理由を、没落した一族の王権回帰願望に求め、光源氏が皇嗣の外戚である権勢家に成長することで両者の〈家の遺志〉が達成されるという[2]、作品第一部の骨格を指摘した。これは通説と言ってよく[3]、日向氏の解釈を基礎として、物語前史を推定する試みが積み重ねられてきた[4]。

しかし、疑問もある。傍線①で入道は、大納言を、「をぢ」と述べるに過ぎず、両者の血縁に言及する部分は他に無い。にも拘らず、先行論の大部分は、入道の父大臣と大納言が兄弟同士で、密接に連帯する関係であったことを前提とする。両者の血縁関係は、物語前史を考える際に示唆的である。特に、共通の「家門」の成員か否かは、〈家の遺志〉論にとって重要だろう。かつ、仮に、その「家門」が何らかの事由により政治的不遇を託っていたという想定が成り立たない場合、論の立脚点が霧消しかねない。ゆえに、こうした不確定要素は慎重な検証が必要だが、近時、大納言は入道の外戚の可能性も指摘されている[5]し、没落の推定も見直しを迫られている[6]。如上の諸問題は、作品中に確たる記述が無く、いずれの立場も推論の域を出ない、というのが論証上の限界ではあろう。だが、これらの事柄が慎重に扱われているとは言い難い現状は問い直されるべきだと考える。

一方で、両者の血縁関係に触れる点や、明石一族が本格的に物語に参画する端緒である点に鑑みても、右の一節が重要な意義を帯びること自体は疑う余地がない。それでは、入道が、「をぢ」大納言の遺言に言及したのは何故だったか。作品形成上、冒頭場面の意義はどのようなものだったかを、まずは問うべきだろう。

本稿では、冒頭場面における入道の発言の真意と、大納言の血統観を分析する。その過程で、物語が進むに従ってそれまで言及されなかった大納言の近親者が登場する文脈の傾向に着目する。そのうえで、冒頭場面における入道の発言意図を解き明かし、一作中人物の意図を超えた作品形成上の位相における意義に説き及ぶ。見通しとしては、大団円の幕引きと取り得る第一部掉尾が、第二部に至ってその主題的印象を変化させる文脈

の仕掛けの端緒として、冒頭場面を位置づけることになると思われる。そうすることで、両家が権門「光源氏家」として再生するという〈家の遺志〉論の立場と表裏をなす〈女系繁栄〉の主題を、物語全般に亙って読み取り得る可能性を論じる。

一、入道の真意

冒頭場面の入道の発言は、光源氏との血縁に触れる点が注目されてきた。明石一族と大納言家が、光源氏と明石の君の代で結合し、栄達に邁進する構図が見出される。ゆえに、〈家の遺志〉論の立場を支える箇所として重んじられてきた。加えて、入道がその同族意識を勝算にしたとも読み取れる(7)。たしかに、入道の発言内容はやや唐突な一方、両者の血縁関係が示されることで、今後展開していく恋愛譚が読者にとって飲み込みやすくなる。冒頭場面にそうした工夫があった可能性は低くなく、第三節で言及する。

他方、入道自身の真意は両者の親類関係の強調にあったか。傍線で示したように、彼の発言には二つの主旨が含まれている点に注意したい。傍線①で、更衣の素姓に触れるのは先述した。ただし、傍線②では、更衣が卒する契機の「宮仕」に触れていた。帝寵深かった更衣が、「人のそねみ」で亡くなる前に光源氏という「いとめでた」い実りを得た。そうした彼女の生涯が「女は心高くつかふべき」なる入道の信条の好例として称揚される。文脈はその直後に、「思し棄てじ」との楽観に収斂する。つまり、傍線①に述べられる血縁の件りの他、「女は心高く」云々の価値観を開陳した傍線②の内容の両方が、入道の勝算だったことになる。このうち、いずれが肝要かと言えば、発言の厚みから見て、後者に重点があったものと考えられよう。

そもそも、いとこ同士、おじと姪、おばと甥とが通婚するのが平安貴族社会である。光源氏と明石の君の関係はいとこの子同士に過ぎず、取り立てて重視すべき近親とは言えまい。それだけを理由に強がることも出来ず、その結果出てきたのが傍線②の話だったろう。

傍線②が過去の物語展開を踏まえていた点も重要だった。大納言は、更衣の入内を、「我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」と「遺言」した（桐壺①三〇）。後見不在の無茶な入内を強いたのである。しかし、更衣本人は長逝しても、光源氏の誕生という成果が残った。その軌跡は、土着豪族の身分ながら、光源氏との縁を懇望する入道父娘の境涯と一部重なる。入道が冒頭場面で更衣を「女は心高く」という信念を貫いた先

蹤とする所以だろう。その更衣の子で、「女は心高く」の生き証人たる光源氏が、同様の境遇にある明石一家を「思し棄て」るはずが無い。従来、等閑視されがちだったものの、それが入道の発言の真意だったに相違ない。

したがって、入道本人は、「をぢ」大納言との血縁を特に重視していたとは考えにくい。あまつさえ、共通の「家門」に固執して、光源氏と娘の結婚を強く望んだ、という通説には疑問が生じる。

というのも、入道と大納言には、「女は心高く」云々の他、見逃しがたい類似点があった。それは、両者ともに、自身を最後に家門が断絶することである。平安時代中期には、中世の「家」へと通じる「門流」すなわち「家門」・「家筋」が派生し始め、これらは政治的地位の血縁による継承が目的だった[8]。いきおい、家筋を継げるのは男性に限られ、女性は継承要員たり得なかった[9]。むろん、その女子の生んだ子が、家門の跡継ぎになる道理はない。一代でも女性を挟めば、血筋は受け継がれても、家筋は途絶する理屈である。このことは、律令規定によって男系の家門形成を促進した蔭位制[10]から、女性が排除された[11]ことの帰結だった。

『源氏物語』中にも、「家」や「門」など、家門を表す語の用例が散見される中、「祖父—親—子」の三世代に渡る用例を分析すると、「男親の男女子」が「祖父」の家門の成員に数えられる例が認められる一方[12]、「女親の子」を「祖父」の家筋に含める事例は見出せない。外孫、すなわち、女系子孫を家門の一員に数えない血統観は、この作品にも基本的に反映していると見てよい。

だから、大納言と入道の考え方は特異と言えよう。大納言は、娘の入内を強行した結果、外孫光源氏が誕生した。入道はこれが大納言の果報だったと言う。その入道は、光源氏と娘を縁づけることに固執している。それは、結縁の結果生まれた外孫が皇室に嫁し、曽孫の代で天皇を輩出する未来図を念頭に置くゆえである。娘を挟んで大納言の血筋を受け継ぐ光源氏、入道にとって娘と孫娘の女子二代を挟んだ皇子。一族の女性によって血筋を継承する子孫の誕生に彼らは執着したように見える。本稿では、父母から女子を経て受け継がれていくこうした血筋のことを、「女系」、血を受けた子孫たちのことを「女系子孫」と称する[13]。世間一般の血統観念の中心たる家門の論理から見れば、女子を経由して受け継がれたはずの女系の血は、「断絶」としか捉え得ないものである。しかし、この二人はあえてそこに重要な血の「継承」を見出して拘った。その点に両者の特異な価

値観が見て取れよう。

彼らは娘の結婚への望みを捨てなかった結果、女系の次世代において、より高貴な「血筋」を形成した。一方、俗人の男子はおらず、彼らの男系の「家筋」は途絶えてしまった。その事実は動かしようがない。こうした事態は、右に見た血統観に照らせば、当然忌避すべきだったはずだろう。[14]

ところが、冒頭場面を見る限り、そのことが懸念されている風は皆無である。大納言が如何なる考え方の持ち主だったか、今の限りでは断定しがたく、後に詳しく論じる必要がある。しかし、少なくとも入道は、家門の断絶など意に介していない。彼の子女は明石の君のみだが、下向した播磨国で「侮られ」、出家した（若紫①二〇二～三）。これで、この一族には男子の後継が生れる可能性が潰え、[15]家筋の断絶は決定的になった。しかし、入道は後に、潔く出家して、親の顔に泥を塗ることを避けた自身の判断を、「よう思ひ放ちてけり」と（松風②四〇四）、肯定的に振り返る。入道が、家門の断絶を忌避していたならば、そうした思考に至ることはあろうはずもない。[16]

入道は女系繁栄を強く志向する一方、男系の家門には微塵の拘りも持たなかった。その彼が、自身の先蹤として、大納言を称揚していた。すなわち、少なくとも入道の考えでは、大納言も同様の思想の持ち主ということになろう。自分たちが背負って立つ家筋にすら執着しない彼らが、女系子孫の起こした新たな家門の興隆に心を砕くというのは奇妙な話である。[17]

このことは、通説が説くように、入道の父と大納言を兄弟と見ても同じ理屈だった。彼らの目指す所は、男系原理の産物たる家門の論理には回収しきれない。にも拘らず、強いてそれに拘って論じると、両者の滅びゆく「家」を、「継承[18]」と言うより消化吸収して、独り光源氏の新たな「家」のみが繁栄した、という以上の結末は見えなくなってしまう。それでは、大納言と入道、各人固有の切願を看過しかねない。

あくまで「家」を中軸に分析したところに、〈家の遺志〉論の限界があろう。だとすれば、専ら作品の持つ男系原理の側面を照射するこの立場と表裏する、別の側面に着目した視座が要請される。必ずしも「家」に固執することなく、『源氏物語』を貫流する「血筋」の論理を読み解くことが可能な、新たな視座が必要なのである。ならば、冒頭場面の入道の口吻に表れる特異な血統観を踏まえ、〈女系繁栄〉という切り口が有効なように思われる。ただし、入道が自分の思想に都合よく、「をぢ」の事績を曲解している可能性もあり得た。大納言の真意を詳らかにした後に判断する必要があろう。

二、肉親から見た大納言の遺志

作品中、大納言の主張に言及した箇所は、北の方が語った「遺言」程度である（桐壺①三〇）。入道の主張の妥当性を検証するための記事は断片的で心許ない。

しかし、大納言の関連記事を拾い集めてみると一つの傾向が見出される。筋の進行につれて、大納言の肉親である人物が順次現れ、新しい情報が開示される文脈が散見されるのである。その端緒は前述の北の方の登場だし、賢木巻では、雲林院の律師（以下、「律師」）も登場する（②一一六）。彼は更衣の「兄弟（せうと）」、大納言の息子である。さしづめ、冒頭場面の入道登場は、そうした文脈の総仕上げと言ったところだろう。

この語り口は、作品が読者に対し、特定の読解を要請した痕跡ではないか。大納言の肉親が順に登場することで、不明瞭な彼の人物像が肉付けされる。物語を読み進める読者は、徐々に明らかになる情報を、従前の物語内容と矛盾しないように組み立て、絶えず解釈を更新し、大納言に対する認識を具体化していくことになる。いわば、読者は、大納言周辺の作中事実について、積極的な辻褄合わせを迫られていると見るわけである。

そう考えると、特に重要なのは律師の存在だった。この人物は、桐壺巻には見えず、賢木巻で、光源氏の逗留先として登場する。大納言の北の方から「はかばかしう後見思ふ人もな」いと語られた更衣に（①三〇）、兄弟がいたというのは唐突の観が否めないが、これ以後は言及されることも無く、従来、あまり注目されなかった[19]。しかし、右に述べた事柄に鑑みれば、軽視することはできまい。この人物が登場することで、読者は既存の読解の修正を要求されるはずだからである。

前節で述べた通り、入道の子女は明石の君一人であり、彼が先蹤視する大納言も、桐壺巻を読む限り更衣以外に子がいた形跡は無い。律師の登場は、その認識への修正を迫るものだろう。すなわち、大納言には家筋の継承要員にもなり得る男子がいたことになる。これは、家や血筋を視座とする以上、看過出来ない事実だった。

ただ、この人物は僧侶である。むろん、僧は家を継がない。彼の出家時期を見極めること無しに、大納言の家門を云々することはできまい。律師の出家時期は、大納言の薨去以前とする説[20]と、大納言の薨去後かつ更衣の入内以前と見る立場[21]があるが、更衣の入内後と仮定する見方は管見では見当たらない。律師を大納言の遺志と絡めて論究する試みも皆無と言ってよい。たし

かに、先に見た「後見」云々の発言に照らしても、これらの想定には矛盾がない。

しかし、疑問もある。専ら、律師は更衣の「兄」と見られている。入内可能な年齢の女性の兄なら、それなりに官歴があるはずだから、「後見」不在と評するのは違和感がある。ところが、本文には、律師は更衣の「せうと」とあるにすぎない。この語彙は、年齢の高下、同腹・異腹を問わず「女性にとっての男の兄弟」を指すのが本義だろう。[22]『源氏物語』中でも、玉鬘や（真木柱③三八一）、浮舟の異母弟などは（手習⑥三六八）、「せうと」と称されるから、律師は更衣の「弟」ということもあり得た。そう仮定すると、更衣入内時に未だ年少で「後見」たり得なかった可能性もある。更衣の活躍如何では、律師が更衣所生の若宮の「外戚として権勢を振るう可能性」[23]すら、十分にあったことになる。それは、大納言が自身の死後も娘の入内を強行しようとした理由として低からぬ蓋然性があろう。

そもそも、父親の死後、女子の入内話が立ち消えなかった事例は更衣に限らない。史実で言えば、嵯峨天皇皇后となった橘嘉智子は幼くして父清友と死別した。作品中では、玉鬘と鬚黒の大君の入内を、父の薨後に今上帝が催促する（竹河⑤六一）。これらの事例で、入内を議される女性に兄弟がいることは見逃せない共通点だろう。玉鬘の大君には同腹だけでも兄弟が三人、史実の嘉智子にも、異腹の氏公がいた。

就中、嘉智子と氏公の例は注目される。氏公は、承和十一年（８４４）、外甥の仁明天皇の治世で右大臣に昇進した。『続日本後紀』の彼の薨伝には、「以太后弟。歴此顕要焉」[24]とすら見える。[25]女子の活躍が兄弟の官途を助けた好例と言える。玉鬘の大君の例も、母の意向で冷泉院に嫁す際、兄の左近中将が今上帝を憚り、「なにがしらが身のためにもあぢきなくなんはべる」と母を非難する（竹河⑤九四）。これも、嘉智子姉弟の例を裏返した格好だろう。

他方、女子にとっても、兄や弟の存在は心強い。たとえば、源雅信は、娘の倫子と同腹の男子たちが、「御後見どもを仕うまつら」ずに次々と出家したことを嘆く（『栄花物語』「さまざまのよろこび」①一五四）。兄弟、とりわけ同母のそれは、「後見」を担う存在でもあった。[26]

異腹の場合は事情が異なる。『源氏物語』中では、今上帝の女二の宮が母親を亡くして、後見する外戚もいないのを父帝が心配する箇所で、「大蔵卿、修理大夫」という外舅の存在が語られる。しかし、母藤壺女御と「異腹」のため（宿木⑤三七五）、頼ることも出来ないという。異母きょうだいは、助

け合う義務や責任が無かったらしい。ただし、右記の嘉智子と氏公は異腹だった。また、夕霧と明石の姫君も異腹だが、父光源氏の意向で、姫君の幼少時から共に過ごす機会が設けられた（蛍③二一六～七）。要するに、両者を仲介する父の意図や、反対に父不在の状況などにより、協力し合う場合があったのだろう。

右の想定は、更衣と律師にもあてはまる。つまり、大納言は、姉更衣の後宮における活躍で弟律師を盛り立て、それにより律師が更衣の後盾として頼もしく力を付けていくという、姉弟の互助関係の構築を意図したと考えられよう。

父親と死別した場合、貴顕の令嬢でも、将来は安泰ではない。『栄花物語』では、藤原伊周の遺訓に、「帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり」とある（①四四八）。そうでなくとも、上達部の父に死なれた結果、老受領の後妻に身を落とした空蟬などもいる。父大納言の薨後、更衣が入内しなかった場合、彼女の行く末も似たようなものだったろう。親の名誉や自己の身位を貶めるくらいなら、曲がりなりにも皇妃として入内した方が、まだしも明るい未来が拓けよう。

右の想定が許されるならば、律師の出家が更衣入内以前と考えるべき蓋然性は低くなる。入内の時点では若輩で、「後見」は出来なかったが、ゆくゆく姉の重要な後盾となることが期待されたのではないか。結果的に、そうなる以前に更衣は卒去したが、大納言も娘の夭折を想定したわけでは、まさかあるまい。更衣と律師が異腹の姉弟なら、桐壺巻で北の方が律師に触れなかったことも、自身の所生子ではないからだと理解出来るようになる。

律師が俗世に見切りを付けて出家の途を選んだのも、更衣の死が契機だろう。互助関係の一角である姉も、父も世に無いとあっては、残された男子が立身出来る可能性は限りなく低い[27]。甥の若宮も、更衣腹では登極の見込みは薄い[28]。光源氏は七歳の年、「外戚の寄せなき」とされており（桐壺①四一）、光源氏三歳の年に姉更衣の卒去に当たって出家したと考えれば帳尻が合う。

そうすると、大納言の家門観は、平安中期の一般的なそれと大差がなかったようにも見えてくる。女子の入内によって男子の活躍を促すのであれば、姉弟の協力によって自身亡き後の家門の維持存続を図る意図を看取出来るかもしれない。

ただし、そう考えるのは早計だろう。大納言が子の将来にかける熱意の程には、明確な差異が認められる。大納言は、更衣

の入内を生誕時から熱望し、自身の死後もその初志を貫くよう遺言した。娘の身の振り方は、自身が亡き後のことも含めて強力に管理しようとしたのである。

他方、息子は出家した。すなわち、大納言から受け継いだ家筋を放棄したのである。藤原道長は、明子腹の三男顕信が出家したことを深く嘆いた（『栄花物語』「ひかげのかづら」①五二二）。庶子でさえそうなら、まして、家門の存続を左右する一人息子の出家を簡単に許可する親がいるとは考えづらい。娘の進退は自身の死後のことまで意のままにしようとした彼なら、息子の前途にも強く執着して、俗世に残って家門の延命に努めるよう、訓戒していても不思議ではないが、その形跡は無い。

このことは、大納言にとって重要だったのは、あくまで娘更衣の将来のことのみであり、息子の官途や家筋の存続には、娘の後見という以上には関心を持たなかった事情を、強く示唆していよう。律師の登場が印象付けていたのは、大納言の家門への執着ではなかろう。むしろ、男女両方の子があった彼が、あくまで娘の入内のみに断固たる拘りを見せたこと、すなわち、女系への執着に他ならなかった。

三、〈女系繁栄〉に収斂する両者の宿願

ただ、大納言の拘りのわけは今のところ説明がつかない。入道の血統観の背景に、「月日の瑞夢」の裏付けがあったことは再説に及ぶまい。対して、大納言固有の遺志の契機となると曖昧で不可解な印象が否めない。

そもそも、大納言の遺志の完成形はいかなるものだったか。更衣臨終時の「聞こえまほしげなることはありげ」な素振りから（桐壺①二三）、藤井貞和氏は外孫の登極が遺志の中核だったと説く[29]。本稿は大納言の願望を「家の遺志」と呼称して家門の論理に回収することには懐疑的だが、大納言が娘に賭けた想いという限りで藤井氏の見解は首肯されると考える。父は死の間際に娘の入内を遺言し、娘は瀕死の床で子の登極を願った。父から娘、孫へと、皇位への願いが受け継がれていく様を読み取ってよい。

ならば、彼の悲願はそう不可解でもなかったのではないか。平安初期以来、天皇が卑官の外祖父を顕彰することが通例化し、特に太政大臣の追贈は天皇の外戚のみが浴する栄誉となった[30]。たとえば、『うつほ物語』は、亡き俊蔭への中納言追贈で大団

円の幕引きとなる（『うつほ物語　全　改訂版』（おうふう　平成一三年）楼の上下　九三八）。更衣も三位を追贈され、それが人々の不興を買う（桐壺①二五）。死後の顕彰が名目だけの空疎なものと思われていたならばこのような反応はありえまい。

加えて、冒頭場面で明かされる「按察使」兼任の地位は重要だろう。浅尾広良氏は大臣任官を射程に捉える地位と説く[31]。そうした設定がこの場面で明かされる意味は軽くない。藤原道綱が病を得て、弟道長に大臣任官を懇願した逸話が『小右記』に残る[32]。道綱も、「按察大納言」を歴任していた[33]。むろん、これは作品成立より時代が下るが、大臣任官を狙える地位にいながら、命を落とそうとする人間が、高位高官に執着するのは人情だろう。息子に高位の夢を託すのは難しい。だから、「生まれし時より思ふ心あり」と将来を嘱望していた娘に拘り（桐壺①三〇）、男系の家筋に見切りをつけたことも、死に際の人間の思考として理解できなくはない。このような大納言の遺志の契機が、冒頭場面の入道の発言により示唆されていたのである。

しかし、そうすると、入道の発言は額面通り受け取れなくなる。大納言の願いは、娘の頓死、外孫の臣籍降下で叶わず終いだからである。更衣の母北の方が、「慰む方なく思ししづみて」（桐壺①三七）、失意のうちに没した事実はそのことを端的に物語る。息子の律師が落魄の印象[34]顕著な雲林院にいたのも明徴だろう。大納言の悲願は、客観的事実としても、文脈上の印象としても、完膚なきまでに敗れたと見る外ない。

不可解な点はそれだけではない。右のように、大納言の願いはあくまで、種々の条件付きの〈女系〉重視と言えた。一方、入道は外曽孫の代で天皇輩出を所期する。大納言の狙いよりも世代が隔たるうえに、姫君が紫の上の養女となることで系譜上の繋がりも秘匿された。満願の達成を見たとして、入道が何等かの栄誉に浴することは無い。現に、姫君腹若宮の誕生後に催された住吉詣ででは、「まじらはましも見苦しくや」と語り手に一蹴される（④一七六）。にも拘らず、娘やその先の子々孫々の未来を度々気に懸けていた（明石②二四五、松風②四〇五）。この点も、自身の栄誉を志向したと思しい大納言とは考え方が異なる。そうした差異に目をつぶり、あたかも、大納言が自身と同志を抱き成功した先蹤かのように語りなしていたのである。

察するに、これは尼君を説得するための会話の綾だろう。尼君は光源氏との結婚に強く反対していた（須磨②二一一）。ゆえに、入道は冒頭場面直前の「唐土にもわが朝廷にも」云々と合わせて、先例を挙げつつ説得を図る男性官人の論戦の流儀を駆使したと思しい。説得の種とするため、大納言父子には成功

例であってもらわねばならない。そのため右の様な、事実を微妙に歪曲した語り口が出来したに相違ない。そのような留保付きで読むべき箇所ならば、物語前史復元の根拠として扱うのは危険かもしれない。この箇所の眼目は、そうした「事実」の提示には無かったろう。

ただ、娘の結婚のために、入内の末横死した人物を挙げるのは確実に逆効果だろう。親類関係だけに絞った方がまだましであった。そうした綻びゆえに、この箇所には重層的な意味を認めざるを得ないのではないか。すなわち、冒頭場面の弁舌の言葉は、作中人物たる入道本人の意志によって尼君を説得するために発せられたものであると同時に、その言葉を借りて作品形成上の位相においても何らかの役割を果たしていると考えられる。この箇所は読者の向後の読解に影響を及ぼし、特定の方向性を示唆するための文脈の仕掛けとして捉えるのが至当と思われるのである。

大納言の「遺志」は疾うの昔に頓挫したが、入道だけは遺言が履行された意義を高く評価した。この評価の違いは、入道自身の経験則から出ていたろう。彼は、大臣の子息から地方豪族に転落したが、娘の「頼むところ」は捨てなかった（明石②二四五）。常に遠大な未来図を念頭にする彼から見れば、外孫が皇籍を外れた程度のことは些細な迂回に過ぎず、決定的な挫折に見えなかった可能性は高い。

そうした考えのもと、入道は彼自身が今後数世代かけて成就を期す「女は心高く」、すなわち〈女系繁栄〉の願いに引き付けて大納言の遺志を語った。その場合、大納言の願いも、まだ成就の途上にあり、入道の宿願と足並みを揃えた〈女系繁栄〉の願いとして完遂が目指される印象が付与されよう。むろん、それは大納言が生前所期した「遺志」とは程遠いが、語り手は他でもない入道である。彼は最初に登場した若紫巻で、その宿願を嘲笑された（①二〇四～五）。ところが、冒頭場面の再登場で、彼我の身分差等、課題は残るにせよ、彼の悲願成就は現実味を大きく増す。その入道の言だけに、大納言の「遺志」の完遂も、無視し難い説得力を持つことになる。とりもなおさず、大納言の遺志の成就は光源氏の再起も意味する。たとえ宿願の様相が入道の主観で歪められていようと、須磨にあって光源氏が苦杯を舐めている現状では、この意味は重い。挙句が、藤裏葉巻で光源氏が太上天皇に准ぜられる起死回生の変則的悲願達成であることは（③四五四）、言わずもがなだろう。

いわば、大納言が外孫に賭けた思いは、入道によって形を変えられ、彼固有の〈女系繁栄〉の宿願に糾合されて、再定位さ

れるに至った。これが冒頭場面の重要な側面だったに違いない。入道は、「をぢ」大納言の遺言を説得に利用した。他方、大納言の宿願の方も、より高次の位相において入道の方便に便乗し、物語のテーマとして賦活させられたのである。大納言も、入道と同様の吉夢なり予言を得ていたと指摘する把握[35]もあるほどだが、そのような強固な絆を看取させる仕掛けは確かに文脈上に施されていたと言える。入道の熱弁が、物語の曖昧な過去を読み変えさせるというわけである。

ならば、実際は手順が逆ではなかったか。入道自身の宿願は、この時点では全体像が掴めないからである。若紫巻で失笑を買って以来（①二〇四）、彼の真意が語られたことは無かった。冒頭場面で、流人同然の相手に一人娘を嫁がせたがる真意も理解しづらい。そのことは、尼君の大反対が雄弁に物語っている。前述のような、我が身を度外視して女系子孫の将来に心を砕き、住吉神を異常な熱心さで崇敬する様などが語られるのは（明石②二四五）、後のことであり、その行動原理たる瑞夢の開示も遥か先のことである（若菜上④一一三～一一四）。したがって、冒頭場面の段階では、度々全容が示唆されてきた大納言の遺志の方がむしろ印象深く、入道の異様な企みにオーバーラップして、両者が近似の、子孫による自己の顕彰の宿願のもとに行動しているかのように読めてくる。そのはずが、明石巻を読み進めるにつれ、大納言の女系重視を一層深化させた趣きの、入道固有の血統観や願いが浮かび上がる仕組みだったろう。

こうした文脈展開は、以後展開される光源氏と明石の君の恋愛譚に話をスムーズに移すための工夫だったろう。この後、光源氏は明石の浦に移ることさえ躊躇し（二三二～三）、恋愛譚もしばし停滞する。これはとりもなおさず、身分格差のある両者の恋愛譚の飲み込みづらさを物語っていた。そこに入道の異様な企みまで加わると、受け入れづらさはいや増す。明石巻で語られるところによれば、光源氏と明石一族の邂逅は入道の熱心な信仰の成果だというが（②二四四）、冒頭場面の説明では「吾子の御宿世」とのみ述べられる（二一〇）。これでは如何にも突飛だし、筋展開上の不自然さが露わだろう。しかし、外祖父の遺志が関わる話柄として、光源氏本人にも当事者性を付与すれば、まだしも恋愛譚始発の糸口になるものと思われる。須磨巻から明石巻への進行には、多少なり唐突とはいえ、如上の工夫が必要だったことが明らかだろう。

冒頭場面の発言は、頓挫した大納言の悲願の再始動のために必要だったことに加えて、明石一族の物語にとっても、筋展開形成上の切実な要請だったことになる。片方だけでは突破口を

見出しづらい両者の物語は、同類として足並を揃えることではじめて動き出すことが出来た。冒頭場面の入道の発言の意義は、当面のところ、この点に求められる。ただし、この箇所の意義はそれに留まるまい。作品全体にとって重要な意味が明らかになるのは、両者の悲願が成就を見る、藤裏葉巻のことである。

四、男系と女系の相剋から見た『源氏物語』

藤裏葉巻では作品第一部の種々の予言が決着するか、その兆しを見せ、それら予言の数々にはこれまで見てきた大納言・入道両者の宿願成就の未来図も包括されている。光源氏に関わり、物語展開の形成に寄与してきた予言の代表的なものは次の三点だろう。

①高麗人の観相（桐壺①三九～四〇）
②「さま異なる夢」の夢解き（若紫①二三三～四）
③宿曜の予言（澪標②二八五～六）

いずれも有名な箇所であるため本文の引用は割愛する。①は、「帝王」になれば国が乱れるが、「朝廷のかため」程度の器には収まらないと評し、光源氏の将来を予示したもの。②は、当時藤壺の宮が孕んでいた子、後の冷泉帝の運命を予告する一方、「違ひ目」による謹慎も示唆する内容。③は、光源氏の三人の子どもの将来を予言するものである。

このうち、①は桐壺巻に配され、光源氏自身の進退に関わることから、第一部の物語の根幹[36]と評される。この観相は、藤裏葉巻で光源氏が「太上天皇になずらふ御位」を得て（③四五四）、完遂を見る。隠れた実父への譲位が叶わず、冷泉帝が案出した次善策と言える（同前）。「帝王」自体になることを避けつつ、臣下の枠を超越した存在に、光源氏を押し上げるものだった。

②で示唆された冷泉帝の即位は、須磨・明石流謫の「違ひ目」を経て、澪標巻で実現する。③は冷泉帝に関する部分以外、未完である。ただし、明石の姫君は東宮に入内し、後宮で群を抜いた威勢を誇った旨が語られ（③四五二）、夕霧は、長らく仲を裂かれていた雲居雁と正式に夫婦となったことで心強い閨閥関係の構築を果たす（③四六四）。姫君の立后、夕霧の任太政大臣の未来にも明るい展望が拓けていよう。①②の予言の完遂を筆頭に、③の予言に至るまで、順次、成就の兆しが見え始めるのが、藤裏葉巻だったと言ってよい。

右の予言の数々は、異なる時点で物語の文脈に現れ、指し示す未来図も違う。しかし、①に占われた「太上天皇になずらふ

御位」は、②③の冷泉帝の実父たることが前提条件だったし、③で立后を予言された姫君は、②の「違ひ目」がなければ誕生しなかった。また、姫君が東宮の世継を産むことで、一門の将来の総帥たる夕霧の大成を支え、夕霧の権勢が中宮となった妹や、外甥の治世を力強く補佐することになる。三つの予言は、相互に支え合い、実現にむけて邁進し、抜き差しならない関係にあったと言える。しかし、予言同士の連関の構図自体は物語を読み進めていくことで徐々に明らかとなり、藤裏葉巻で掉尾を迎える。[37] 実に巧妙な作品の語り口が看取されよう。

光源氏が「太上天皇」に准ぜられたのは、大納言の遺志の変則的な成就だろう。姫君の立后はむろん、入道の野望の実現である。各人の切望した未来が、光源氏一門の繁栄に包括されて満願成就を迎える。その意味で、『源氏物語』の第一部は、大納言や入道の〈家の遺志〉が、光源氏に引き受けられて達成されていく過程を語っていた、と見る把握には、首肯出来る部分も多い。

しかし、第二部に至って右のような大団円の印象を覆す出来事が起こることはどう考えるべきか。すなわち、若菜上巻で入道の手紙が都に届けられる件り、そして、若菜下巻で冷泉帝の退位に伴い、東宮の即位、姫君腹若宮の立坊が行われる箇所である。

入道の手紙には、彼が感得した「月日の瑞夢」のことが書かれており（④一一三～四）、姫君腹の若宮は、その瑞夢により、明石一族の〈女系子孫〉として登極することが予言されていた。それ自体、光源氏にとっても慶事だが、引き換えに、冷泉帝が継嗣を残さぬまま若菜下巻で遜位する（④一六四～六）。文脈上、光源氏に喜色は皆無であり、冷泉帝の退位を残念がるばかりだった。自身の男系の血筋を隠密裏に受け継ぐ冷泉皇統が樹立され、その皇祖となる展望[38]が潰えた一方で、明石の〈女系子孫〉たる若宮が、皇位に向けて歩を進めたことが、悲嘆の理由だろう。つまり、ここには、光源氏の男系原理の血統観と、明石一族の〈女系繁栄〉の価値観の相剋が潜在していたのである。

右の内容は以前に詳しく論じたため、[39] 述べるのは要点のみに留める。加えて、本来であれば紛れもなく挫折したはずの大納言の宿願は、冒頭場面における言挙げにより、入道のそれと同類の〈女系繁栄〉の悲願として物語の文脈に賦活され、外孫が、「太上天皇」に准ぜられる変則的な成就を見た点を、確認しておきたい。長い時間と紆余曲折を経た末に、死後の顕彰を目的とした「女系重視」から、自身の栄耀を度外視した〈女系繁栄〉の願いに姿を変えはしたが、大納言の〈遺志〉も完遂されたと

見て良い。冒頭場面で入道が述べた「女は心高く」云々が文字通り実現したわけである。

藤裏葉巻を見る限りでは、光源氏を中心に、大納言や入道などの宿願の帰趨は文句の無い幕引きと見えた。しかし、若菜上下巻に至るや、光源氏固有の男系の夢は潰えた一方、女系子孫の即位を期した大納言は、その悲願を変則的に成就させた。それ以上に〈女系繁栄〉に執着した入道ともなると、外孫の立后と曾孫の踐祚という瑞夢の予示に加えて、二代先まで女系天皇が輩出される見込みとなった。皇統関係に限れば、光源氏の願いは第二部でも進展は見られない。辛うじて、第三部竹河巻で冷泉院に男皇子が生まれるが、光源氏亡き後、残された冷泉院は独り、「おりゐたまはぬ世ならましかば」と、「いと口惜しとなん思」す以外に仕様がなかった（⑤一〇四）。結局、予言以上の実りは望めなかったのである。

他方、臣下の家としての光源氏一門の栄華は末永く続く見通しだった。皇統にまつわる事柄こそ女系の後塵を拝する形になったものの、夕霧以下の男系の家筋の隆盛も重大な問題ではあったろう。

ただし、彼にとっては自身の男系皇統の樹立こそが究極の目標だった。既に臣下を超越した身位を有する以上、最上流とはいえ、臣下の家筋の維持存続は自身の縮小再生産でしかない。

光源氏の冷めた態度は、内孫の扱いに顕著である。若菜下巻では、姫君腹皇子女を愛育する紫の上を羨み、花散里が、藤典侍所生の夕霧の三女を引き取る（④一七八）。光源氏は、これら孫たちを愛育することで、「つれづれをも慰め」る日々を送る（同上）。特に、夕霧の子女たちは内孫、すなわち男系子孫であり、家筋の盛衰を左右する重要な存在だろう。花散里が引き取った三の君は、ゆくゆく入内する可能性も高い。現に、匂兵部卿巻によれば、生母を問わず長幼順に姉妹が次々と入内するのが既定路線だった（⑤一九）。数代に亙る皇統との姻戚関係を築き上げ、父夕霧に予言されていた太政大臣就任はもとより、兄弟たちの立身も左右する要の一角だったろう。しかも、六条院で愛育されたとあれば格別に箔も付く。三の君は庶腹だから、実際にはそうした含みもあったろう。ところが、文脈を読む限りでは、紫の上への花散里の羨望を満たし、光源氏の無聊の日々を紛わせるために差し出されているに過ぎない。権門「源家」の将来を担うはずの三の君の重要性がほとんど読み取れないのである。

この一事をとっても、夕霧以降の一門の盛衰が、光源氏にとって重要性の低い課題であることは明らかだろう。それは、彼の

胸裏における問題であると同時に、作品全体における主題的な比重の問題でもあったに違いない。もとより、宿曜の予言でも、兄妹二人の遠大な宿運に比して、夕霧の行く末は「劣り」と位置付けられたことが想起される。家筋の維持は、万人が苦心する重要事だったに違いはあるまい。しかし、それをあえて「劣り」と言い切ってしまうところに、この作品の重要な骨格の一つたる予言によって形成された価値観が、明瞭に表れていると考えざるを得ないだろう。

第一部の終焉とともに大団円の幕引きと見えた宿願の物語は、第二部の始発を契機にその相貌を大きく変容させる。これは、第一部を読んできた読者の認識を、第二部で覆すための、文脈に施された仕掛けだった。これが発動することで、光源氏を祖とする一門や皇統の隆盛を語っていたように見えた話が、大納言や明石一族を中心としたそれに変貌する。同時に、この仕掛けは、光源氏が体現していた「男系原理」の物語から、〈女系繁栄〉の伝説へと、価値観を転倒させる機構だったと言えよう。冒頭場面において、唐突にも思われた入道による大納言の〈遺志〉の言挙げは物語正篇に潜在した仕掛けの端緒と位置付けられる。入道が自身の宿願に引き付けて大納言の遺志を語りなしたことで、〈女系繁栄〉のテーマは、作品全体の発端たる大納言の遺言以来、首尾一貫して作品を支えた主題として位置づけられる。そうした作品固有の価値観と、男系原理の血統観の齟齬の末、後者が敗れ去る過程を、この作品は一貫して物語っていた。冒頭場面は、そうした血統観の物語の始発たる点で意義深かったに相違ない。

ところで、右に見てきたように、第一部末尾と第二部劈頭で、宿願の物語は一通り清算された。そこに、若菜下巻で、第二部最大の事件たる柏木と女三の宮の密通が出来する。この出来事も、男系と女系の相剋の視座から読み解く余地があるように思われる。

そもそも、密通事件は、右に見た各人の宿願の物語と無関係の事柄ではない。

さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなめり、この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや、と思す。

（柏木④二九九）

右は、密通の末、薫が誕生した際の光源氏の胸中である。傍線部は、むろん、藤壺中宮との不義の結果、冷泉帝が生れたことを指す。前の御代替りの場面で、光源氏は、皇統断絶を嘆息する傍ら、冷泉帝の治世が無事終わったことを、「罪は隠れて」

と安堵していた（若菜下④一六五）。それから僅か一年足らずで、さながら冷泉帝誕生秘話の再現たる密通事件が、今度は自身に降りかかる。薫の出生が光源氏にとって、自身の「罪」の「報い」と感じられて仕方なかったのは、そのような事情に起因していたろう。冷泉帝の治世の終焉によって、予言通り過不足無く終ったと思われた光源氏の宿願の物語は、その後に手痛い清算を迫られる展開が待っていた。

密通の当事者のうち、柏木の血統には注意を要する。彼は、内大臣家の嫡男で、藤氏本宗の家門を背負う「期待の星」であることが、第二部に入って強調される。[40] ただし、柏木の母北の方は、桐壺巻の右大臣（以下、便宜上「旧右大臣（家）」と称する）の四の君だった。すなわち、柏木は、旧右大臣家の〈女系子孫〉でもあったことになる。実は、第二部の文脈は、柏木を内大臣家嫡流として強調する一方、彼の母方の血筋を浮き彫りにしてもいた。女三の宮を熱望する柏木のため、父内大臣は、北の方を通じてその妹朧月夜を頼り（若菜上④三七）、彼女を寵愛した朱雀院に降嫁の件を掛け合ってもらおうとした。柏木と女三の宮を縁づけるために、旧右大臣家の人脈が総動員された格好だが、これも、柏木本人が外戚家の人々から重んじられた事情を示唆していよう。[41] 朱雀朝の終焉とともに、物語の表舞台から姿を消したかに見えた旧右大臣家だが、第二部の序盤ではその存在感を取り戻し始めている。柏木は、旧右大臣家の血筋を女系において継ぐ存在として定位されたうえで、密通事件に突き進む。

加えて、当事者のもう一方、女三の宮は朱雀院鍾愛の女子である。要するに、密通事件の当人たちは、第一部で光源氏に敗北した勢力の女子、または、〈女系子孫〉だったのである。そのような因縁を持つ者たちが、かつて光源氏自身が犯した不義の「罪」の応報を彼に突きつける。これは、御代替りで男系皇統への野望が潰えたのと、ちょうど入れ替わる形で進展することだった。そのことで済んだ話だと思い込んでいた「罪」の清算を、さながら自身の過ちの再現として、そればかりか、過去に自身の栄華の踏み台にした人々の〈女系〉の血によって、迫られるのである。朱雀院の「復讐」[42]とまで言うつもりは無い。しかし、男系と女系の血統観の相剋という、作品の論理を看取するには、十分示唆的な系譜設定だったに相違ない。女系の視座から密通事件を読み解くことで、光源氏にとって実に背筋が寒くなる因縁の構図が浮き彫りになるのである。

その果てに誕生した薫の将来を、世間では、二品内親王という「心ことなる御腹」のために嘱望していた（柏木④

二九九）。第三部冒頭でも、光源氏亡き後の子孫たちの評判が語られる箇所があり、匂宮と並んで「きよらなる御名とりたま」う君達として名前が挙がる（匂兵部卿⑤一七）。一方で、本来の嫡流、夕霧家の男子たちは全く相手にされない。たしかに、内親王所生の高貴さは藤氏領袖の令嬢を母に持つ夕霧すら凌ぐ。ゆえに、光源氏の遺徳を辛うじて継承し得る存在として言挙げされたものだろう。薫の声望や華々しい官歴、女御腹皇女を正式に降嫁される特別待遇[43]は、嫡流のそれと映る。少なくとも、物語中の貴族社会において光源氏一門を盛り立てる代表格の座は、夕霧一家ではなく薫に移っていると見なくてはなるまい。

したがって、光源氏の男系家門繁栄の実態すら考え直す必要があろう。家祖光源氏亡き後、一門の顔は薫であり、実際には光源氏の血など承けていない。そればかりか、過去に光源氏の栄華の陰で踏み台にされた者たちの女系の血筋に連なる存在だった。最重要の野望たる男系皇統樹立は頓挫し、残る、男系家門繁栄というスケールの小さな課題すら、その代表格の座をよそ者の女系の血筋によって簒奪されてしまった。

以上の考察に鑑みるに、この作品は、「家の繁栄」ではなく、むしろそうした「家」中心の価値観の解体をこそ語っていたことになる。世間一般の価値基準と言える男系原理の血統観と、作品独自の価値観たる〈女系繁栄〉の血脈意識の衝突の果てに、前者が敗れ去る。そういう筋書きこそ『源氏物語』の核心だったに相違あるまい。

特に断りのない限り、古典作品本文の引用は小学館「新編日本古典文学全集」により、頁数等を示した。

（1）「神話の論理と物語の論理」『源氏物語の始原と現在（定本）』（冬樹社　昭五五）。阿部好臣「明石物語の位置」『物語文学組成論Ⅰ』（笠間書院　平二三）もこの方向性である。

（2）「大納言の遺言と明石入道の「夢」」『源氏物語　東アジア文化の受容から創造へ』（笠間書院　平二四）。同氏は、「光源氏論への一視点」『源氏物語の主題』（桜楓社　昭五八）以来、繰り返し〈家の遺志〉論を説いてきた。

（3）坂本共展「五つの大臣家と明石入道」『源氏物語構成論』（笠間書院　平七）、辻和良「桐壺帝の〈姿〉」『源氏物語の王権』（新典社　平二三）等。

（4）代表的なものでは、袴田光康「雲林院の律師」『源氏物語の史的回路』（おうふう　平二一）、助川幸逸郎「源氏物語の「呪われた部分」」（『源氏物語のことばと身体』青簡社　平二二）等。

（5）秋澤亙「『源氏物語』の名義」『源氏物語の准拠と諸相』（おうふう　平一九）

（6）浅尾広良「大納言と若紫巻」『源氏物語の准拠と系譜』（翰林書房　平一六）。拙稿「女系繁栄譚としての明石一族物語」（『『源氏物語』明石一族物語論』新典社　令四）では、入道一家が政変などで没落した事

実は読み取りがたいと論じた。

(7) 注2の日向論（平二四）等

(8) 明石一紀「鎌倉武士の「家」」『古代・中世のイエと女性』（校倉書房　平一八）

(9) 服藤早苗「平安時代の氏―家と女性」『家成立史の研究』（校倉書房　平三）

(10) 胡潔「蔭位制について」『律令制度と日本古代の婚姻・家族に関する研究』（風間書房　平二八）

(11) 服藤「平安前期の貴族の家と女性」『平安朝の家と女性―北政所の成立』（平凡社　平九）

(12) 三世代にまたがる「家」の用例としては、「致仕大臣―内大臣―弘徽殿女御」までを含む例（少女③三六）、「光源氏―夕霧―夕霧の男子」までを含む例（若菜下④二七五）がある。

(13) タームの指し示す事象が拡散することを防ぐため、本稿では特に、父母に対して「女子」そのもの、「外孫の男系子孫」は、「女系子孫」の範囲に含めないこととする。

(14) 注3の坂本論は、女子の血が皇統につながることは、「大臣家に生まれた者が男子の方で位を極める望みを断たれた時、理想として願うところ」とするが、この作品固有の価値観と見るべきだろう。

(15) 坂本和子「光源氏の系譜」（「國學院雑誌」第七六巻一二号　昭五三一二月）は、「男子の誕生も得られ」なかったと説くが、むしろ、入道自身が進んでその可能性を断ち切ったのである。

(16) 名波弘彰「『源氏物語』と住吉・八幡信仰の伝承」（「文芸言語研究文芸編」第二二号　平四　九月）は、入道の志向を「断絶への意志」と評する。男系に関してはそうとも言えようが、女系子孫の繁栄には執着していると見るべきだろう。

(17) 注2の日向論（平二四）は、大納言と入道が、自家の「断絶を代償」に、「女子を介して新しい源家の再生にかけた」と説くが、「代償」と評するには未練を残す様子が皆無である。

(18) 注3の坂本論

(19) 小山利彦「源氏物語における雲林院と紫野斎院」（『講座　平安文学論究　第十三輯』風間書房　平一〇）、根本智治「光源氏の雲林院籠り」（「中古文学」第四四号　平二　一一月）、注4の袴田論など。

(20) 注2の論、注4の袴田論など

(21) 田坂憲二「『源氏物語』の編年体的考察」『源氏物語の政治と人間』（慶応義塾大学出版会　平二九）

(22) 同腹の兄弟を指す、と説くのが一般的だが（中田祝夫監修『古語大辞典』（小学館　昭五八）など）、本稿で挙げた事例はいずれも「異腹の弟」の確例である。

(23) 注2の日向論（平二四）

(24) 承和十四年（８４７）十二月十九日条

(25) 実際には兄である。

(26) 注4の袴田論では、律師の出家が大納言の意向だった可能性を指摘する。

(27) 土田直鎮「身分と昇進」『（日本の歴史⑤）王朝の貴族』（中央公論新社　昭和四八年）

(28) 秋澤「中の品の女性たち」（注5前掲書）

(29) 「ふたたび「桐壺の巻」について」『源氏物語入門』（講談社学術文庫　平成八年）

(30) 北村有貴江「贈官としての太政大臣」（「寧楽史苑」第四五号　平一二月）

(31) 注6の論

(32) 寛仁三年（一〇一九）六月十五日条

(33) 長保四年（一〇〇二）に任じられ、寛弘四年（一〇〇七）に東宮傅に

転じている（『公卿補任』）。

（34）注19の根本論

（35）伊井春樹「桐壺更衣の運命」『光源氏の運命物語』（笠間書院　平三〇）

（36）日向「光源氏の王権と「家」」『源氏物語の準拠と話型』（至文堂　平一一）

（37）高木和子「三つの予言」『源氏物語再考』（岩波書店　平二九）は、予言が相貌を変化させつつ、藤裏葉巻に収斂して光源氏の栄華の最終的な姿として実現されると説く。

（38）藤井「「宿世遠かりけり」考」（『源氏物語の表現と構造』中古文学研究会編　昭五四）は、実子を通じて光源氏が「王権を回復し、わが手にした」と説く。冷泉帝を通じて皇統に触れることは格別の重要性を持っていた。

（39）注6の拙稿

（40）日向「柏木物語の方法」（注36前掲書）

（41）今井久代「柏木巻物語の「身」と「心」」『源氏物語構造論』（風間書房　平一三）は、柏木が「母の愛子として右大臣家の懐深く成長した」と説く。

（42）三谷邦明「病める朱雀院」（『源氏物語作中人物論集』森一郎編　勉誠社　平五）

（43）今井「皇女の結婚」（注41前掲書）